

---

# TOWRM3 ~ 二人が紡ぐルミナシア伝説 ~

鱗斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T O W R M 3 ～二人が紡ぐルミナシア伝説～

### 【Nコード】

N 5 6 3 0 V

### 【作者名】

鱗斗

### 【あらすじ】

白い光に包まれるは、一人の少年と一人の少女。

記憶の無い二人と小さなギルド・『アドリビトム』はやがて大きな出来事に巻き込まれてゆく……

その時彼らが見るものは……？

## プロローグ・記憶喪失とギルド（前書き）

初めましての方が多いかも知れませんがね。

鱗斗と言います。

誤字脱字・解釈の違いなどで読者のみなさんを混乱させてしまうかも知れません。

その際は遠慮無く指摘していただければ幸いです。

それでは、始まります。

## プロローグ・記憶喪失とギルド

- - - ここは、何処だ？

- - - 僕は、

- - 誰だ？

小さく、だが徐々に優しい光が、その“空間”に満ち溢れていく。

それは、『彼ら』を包み込む。

まるで、赤子を抱く母親のように。

そして、やがて- - -

カノン・グラスバレーという少女は、ギルドの仕事の為に外へ出ていた。

ルバープ連山と呼ばれるそこは、広大な面積を誇り連山という名の通り、たくさんの山が連なっている。

彼女は仕事を終え、ギルドへ帰還しようとその山を降りようとした時だった。

空に、白く光る『何か』が山の頂上付近へと飛んでいった。

「今の……何だろう？船が向かえにくるまでまだ時間もあるし、ちよつと見に行ってみよう」

カノンノは、何かが向かった先へと歩を進める。

やがてたどり着いた先に、白く光る球のようなものが『二つ』浮かんでいた。

「何……光……？」

その光には、『人』の姿をした……否、どこからどうみても、『人』が包み込まれていた。

「人……だ！？空から人が……！！」

その光は、少しずつ地に降りてゆく。

やがて、地に落ちた二つの『光』は、消えてゆき、二人の『人』の姿が露わになった。

一人は、緑色のロングヘアの少女で、手に握られているその杖を見る限り、魔術を扱う職業……魔術士だった。

もう一人は、青髪ショート少年で、同じく手に持つ武器……身の丈以上の大剣から推測するに、彼の職業は大剣士だろう。

二人とも年齢はカノンノと同じくらいで、どちらも整った顔立ち

をしていた。

数分後――やがて二人は目を覚ました。

二人は、辺りをキョロキョロと見渡し、やがてカノンノの姿を確認する。

二人を看っていたカノンノはその視線に気づくと、

「あ！気がついたのね。あなた達、空から降りてきたんだもん。すっごく驚いたよ！」

「空……から？」

青髪の少年が聞き返す。

「うん！あれは、何かの魔術なの？」

「？いや……何も分からないんだけど……」

少年は、何も覚えていないような――そんな表情で聞き返す。

隣にいる少女も同じく、首を傾げたりして、何も分からないようにしていた。

「覚えていないの？あなた達、空から降りてきたのよ？」

「それって……本当……？」

今度は少女が聞き返した。

「うん。光に包まれて、フワフワと降りて来たんだよ?」

依然、二人は分からないといった表情をしていた。

混乱しているのかな?と重い、カノンノは一度その話題を打ち切り、

「ともかく、気がついて良かった。 - - 私はカノンノ。カノンノ・グラスバレー。あなた達の名前は?」

「僕は - - シオン」

「私は……ネオン……」

まるで自分の名前に自信が無いように - - この名前なのかという確信が無いように、二人は名前を少し躊躇ってから名乗った。

まるで - - 『記憶を失っている』かのよう

「シオンとネオン……いい名前ね。とりあえず、ここは危険だから、山を降りましょう。私たちの船が向かえに来てくれるんだ」

バンエルティア号。

この船はカノンノが属している『アドリビトム』というギルドが仕事の依頼の受託や、仕事先への移動、メンバーの生活場所として利用している船だ。

空を飛ぶ船なので、遠い地方への移動も短時間で行える。

その船のホールに、カノンノとシオン、ネオンは居た。

三人は、『アドリビトム』のリーダーである、アンジュ・セレーナの下へと来ていた。

「お疲れ様、カノンノ。あなたのお陰でペカン村の人たちの移民は無事に済んだよ」

アンジュはカノンノに労いの言葉をかけると、二人を見て、

「ところでそちらの二人は？」

カノンノは二人と知り合った事について簡単に説明した。

「そうなの、じゃあまずは自己紹介ね、私はアンジュ・セレーナ。

・・・あなた達の話聞いてもいいかな？」

「僕は、シオン」

「私は、ネオン」

「僕たち、記憶がないんです。自分がどうしてあそこにいたのか、どこから来たのか、果ては・・・どこで生まれたかさえも」

名前以外の記憶は、無い。

「アンジュ、私、二人をここに……」

「そうね……記憶が無いなら、記憶を取り戻すまでここに置いても構いません。でも、先の話を聞く限り、あなた達は体力には自信がある様だし、ここで働いてもらいましょうか」

「それじゃあ今から二人を、『アドリビトム』の一員として迎えるわ」

これから始まる二人の少年少女の物語。

後に世界を巻き込む事になる、壮大な物語は、小さな一つの船の中で幕開けた。

chapter:i アップルと記憶(前書き)

お待たせしました！

第二話……という名の第一話です

タグとのテンションの差は歴然ww

誰か俺に明るい話の書き方を教えてくれエ……

## chapter:1 アップルと記憶

今現在、僕 - シオンはネオンとカノンノでアップルを五つ取ってくるという依頼を行っている。

アップルは別に船内の店でも買うことが出来るが、何でも僕たちがこと戦闘に関する記憶も無い事を話したら、「それなら訓練も兼ねてフィールドから取ってきてね」とアンジュさんに言われたので、それに従う事に。

しかし、僕たちはアップルという『何か』が分からない。多分、ネオンも同じだろう。

僕らは、記憶喪失だ。

とはいえ、本当にそうなのかも、分からない。

記憶を失ったのか、あるいは、破壊されたのか。大穴で、僕らはこの姿で、生み出されたのか。

まあ、大穴に入る事はないだろうがー（ちなみに穴に入りたくないような恥ずかしい気持ちになる事を覚悟して、以前カノンノにその大穴について話したら「それってデイセクターみたいだね」と言われた。はて、デイセクターってなんだろう？）、前者である二つの可能性は十分にあり得る。

まあ、だからといってあまり急いで思いだそうとするよりは、ゆっくりと思いついた方が良くとアンジュさんに言われたので、とりあえずはここ、アドリビトムの船員として、働く事に決めた。

そして、現在。

僕らは コンフェイト大森林にてアップルを探している。

最も、さっきも言ったように - - 僕はアップルがどういうものかを知らない。もしくは、忘れているのだ。

全く未知のものを探すのは至難の業ー（っていうんだっけ？）だ。ちよっと聞いてみようか。

「ねえカノンノ、そういえばアップルって、何？」

ピタリ、とカノンノの足が止まる。同時に、ネオンも足を止めてこっちを向いた。

「……え？」

「いや、アップルって……ナニカナーって……もしかして聞きちゃいけないものなの？」

なるほど、アップルは『とつぶしーくれつ』と呼ばれる物だったのか、なら仕方ない……「ああ待って！何か勘違いをしていると思う！」

「……へえ、記憶喪失ってそんな事まで忘れちゃうんだね」

カノンノに、僕たちの記憶喪失の度合い……名前以外は何も知らない《……………》ということを改めて説明した。

カノンノはどうかやら少し勘違いしていたらしく、僕たちの記憶喪失は自分がここまで、どこで育ってきたか、などのエピソードにまつわる記憶だけを失ってしまっていた、という風に解釈していたら

しい。

自慢ではないが僕たち・・・少なくとも僕はエピソードにまつわる記憶と、例えばアップルがどういう代物なのか、という言葉の意味に関する記憶を失っている。

本当に・・・名前しか覚えていない。

まあ、日常会話レベルの語彙も覚えているが。

それは置いておこう。

「んーと、アップルって言うのはね……」

カノンノはスケッチブックを取り出して説明を始める。

アップルの絵を書こうとしているのか、ペンと筆で丸みを帯びた形をした『何か』を書いていく。

「・・・これが？」

「そう、これがアップル」

赤くて丸い……。

「バラ科アップル属の落葉高木樹の果実、味は酸味があり甘い」

「そうそう！ アップルパイとかにしたらとってもおいしいんだよ！ ……って、分かるの？ ネオン？」

ネオンはうつむいたまま、こちらを見ることは無く、小さくうなずいた。 ……どうやら、僕とはちがって、そういった記憶は残っているのかもしれない。

そう思い、僕たちは再びアップル探しを再開した。

アップルがどのようなものか知ると、思いの外簡単に五個見つかることができた。

何も情報を渡されずに探すよりも何らかの情報を知りながら探すのでは目的の物を見つける可能性は上がる - - まあ至極当たり前の事なんだけど、それでもそれを実感できた。

ついでだから20個ほど持って帰り、残りの15個はロックスに渡した。今日のおやつはロックス特製のアップルパイ。

出来たてのアップルパイはそれはとても甘く、美味しかった。

## chapter:1 アップルと記憶(後書き)

- テイルズオブポストスク립ト -

シオン「って、なにこれ？」

カノン「なにになに……これは何でもアリのコーナーです。他のキャラと絡むのもよし、メタ発言も許可。更に読者の皆様の質問や、ここでこんなことをしてほしい！なんていう要望にもお答するコーナーです。……だって」

ネオン「メタ発言……ってなに？」

カノン「例えばこの話を書いている最中の裏話をしちゃったりとか作者の身の上話とか中の人ネタとか」

シオン「少なくともここで話すべきではないものが混ぜてる気が！？」

カノン「これぞ後書きクオリティー！」

ネオン「くおりていー」

シオン「……キャラ崩壊も追加って事で……」

## chapter 2：見たこともない（前書き）

今更ながら注意点

駄文です

雑表現です

キャラおかしいかもです

ストーリーはまだすすみません。恐らくあと2、3話は一話完結もの

以上の点に注意したうえでお読み下さい。

## chapter 2 : 見たこともない

「・・・はあっ！」

まるで固いものを噛み砕くような、そんな鈍い音が響く。大剣が、魔物の頭骨を砕く音だった。

剣でまっぶたつ・・・というよりはハンマーによって叩きつけられたように殴打された魔物の死骸は、やがて空気に溶け込むように消えていく。

「よし、終わりー!!」

「結構早く終わったね！」

「強かった……」

シオン、カノンノ、ネオンはそれぞれ感想を漏らす。

ゲコゲコ10匹の討伐、という依頼だ。その依頼は決して難しい依頼では無いが、それでも彼ら・・・シオンとネオンにとっては厳しいものがある。

彼らは記憶喪失だ。それも、武器や魔術は使えても、その使い方が分からないという、いわば戦闘経験についてまで忘れている程の。

カノンノは、そんな彼らの指導係として、彼らの手助けなどをしてる。

その成果もあってか、二人は発展途上とはいえ、着実に実力を付けてつつある。

「それにしても、シオンの攻撃は豪快だね！」

カノンノがシオンの剣技について感想を言う。

地面を振るわしかねない・・・は言い過ぎだが、しかし魔物の頭を砕くその迫力は、大剣ならではのそれなのだろう。

「そうかな？ それでも、この辺りの魔物は段々弱く感じてくるようになってきたよ」

謙遜しつつも、着実に腕が上がってきている実感があるのだろう。

「ネオンも、どんどん新しい術を覚えていつてるね」

「うん、・・・また、覚えた」

覚えた、を強調しながら言うネオン。

「へえー、どんな技？」

「待ってて・・・歌え、響け、豊かなる幻奏・・・カンタービレ！」

すると、シオンの足元に風が集まっていく。

「え？僕？」

集まった風は、やがて交差しながら空へ向かっていく。

その風にあおられたシオンは、まるで踊るように回転している。  
やがて、風は止んだ。

「す、すごい！ 初めてみた術だよ！」

カノンノは興奮してネオンの術に魅せられていた。



撃波が発せられ、目の前にある木を薙ぎ倒した。それは、カノン達が耳を塞いでいた手を離すのと同じタイミングで、彼女達から見れば、不意を突かれたような、そんな一撃だった。

「隙が出た瞬間を狙い魔人剣で攻撃するー名づけるなら音・魔人剣ってところかな？」

「いや、技名は良いんだけど……」

「それ、うるさい……」

確かに、敵の隙を創り出すための爆音が、味方の妨げになっているのは、マイナスにつながる。要するに、

「この技は、改良の余地あり……だね」

「うわーん？」

繊細なガラスのハートの持ち主、シオンはカノンノの宣告に思わずなみだを流す。

「だ、大丈夫だよ！ 私もー付き合っただけだから」

「うう……ありがと……」

かくして、シオンの音・魔人剣は三日三晩の訓練を経て、ようやく完成したのだった。



## chapter 2：見たこともない（後書き）

カノンノ「テイルズオブ……」

シオン「ポストスクリプト？」

ネオン「始まるよ」

カノンノ「略してTOP？ 今までのシリーズの略称でPは無かったのが都合？」

クレス他「解せぬ」

シオン「ちょ、カノンノ？ファンタジアの方々がすごい形相でこっち見てるって？」

カノンノ「あれ……ファンタジアってFじゃないの？」

ネオン「TALES OF PHANTAGIA って書いてた気がする」

カノンノ「……さーて、今回は読者さまからのリクエストに答えようと思いまーす」

シオン「無かったことにした？」

カノンノ「今回は、刀剣士さんからのリクエスト？いつもありがとうね」

ネオン「リクエスト内容は……小説書いてるときの苦悩話、だって」  
カノンノ「……うん、リクエストされたからには話さなきゃいけないけど、さ」

ネオン「正直言っつてつまんないはなしだよ」

シオン「ぶっちゃけた？」

カノンノ「それじゃあ簡単に話すよ。強いていうならネタを文章に出来ない事が苦悩かな。ほら、頭の中で考えてる時の話って大体はこれは文章にしたら面白そうだなって話ばかりなの。でも、文才が無いの。そのせいで、自分の考えている半分くらいの内容しか伝えられないってところが苦悩だね。下手に変わった事したら空回りしちゃうし。長文、ゴメンね」

ネオン「予想以上に面白くも何ともない話だね」

シオン「またそんなはつきりと……」

カノンノ「多分この説明も伝わるかどうか分からないしね。……  
おっとわそろそろお時間のようですよ！また来週」

シオン「来週までに書けるか分からないけどね」

ネオン「しーゆーざねくすとたーいむ。ばいばーい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5630v/>

---

TOWRM3～二人が紡ぐルミナシア伝説～

2011年10月22日00時18分発行